

## 出会うべくして出会った君がいる！

＜令和3年度『山中だより』第3号「三年生へ贈る言葉」原稿＞

私自身は、皆さんとこの山潟中でたった一年間のお付き合いでしたが、新型コロナウイルス感染状況の荒波の中、たくましく辛抱強く学校生活を送ってきた3年生の姿に、大いなる敬意を抱くとともに、そんな皆さんと出会えたことをたいへん誇らしく思っています。

学校の教師をしていると、卒業してからも教え子やその保護者・地域の皆さんと今でも連絡を取り合ったり、たまに合ったりすることも当然あります。

昨年末、新型コロナウイルスが一段落した頃合いを見計らって、以前私が学年主任をしていた学校の懇意にしていたお父さん連中数名と、久しぶりに酒宴の席をともしました。教え子である子どもたちの近況を酒のつまみに、とても懐かしいひとときを過ごしたのです。

宴が始まってすぐ、あるお父さんに「先生、うちの息子が今東京から帰省中なんです、このコロナ下で元気がないので、ちょっと檄を飛ばしてくれませんか。」と頼まれました。

アルコールもOKな年齢になったので「じゃあ〇〇をここに呼んでください。」という、電話をかけた父親に「先生に会わせる顔がない。」と言っているというのです。すぐさま私が代わって電話口に出て、「来ないなら、もうお前と一生縁を切るぞ。」と冗談めかして言うと、すぐさま母親に車で送られてやってきました。

確かに、明朗快活な中学校の頃の様子とは異なり、明らかに元気のない様子でした。いろいろ話を聞くと、一浪して猛勉強の末、第一志望の慶應大学に合格して喜んで入学したものの、新型コロナウイルスの影響で、授業はオンラインでキャンパスに通うことも一切ままならず、サークルに入って友だちをたくさんつくって旅行もして、などと思い描いていた夢の大学生活とはかけ離れた日々悶々としているとのこと。1年時は、勉強にも全く身が入らずオンライン授業を受けずに留年。この2年目に期待していたが、あまり状況は変わらず……。というようなことでした。

その場で、彼に具体的にどんな言葉を投げかけたか覚えていません。でも、横に座った彼の肩を抱き寄せながら、自分のありとあらゆる引き出しを開けて、硬軟織り交ぜて叱咤激励をしました。私にとっては強烈な“檄”のつもりが、彼にとっては単なる説教にしか聞こえなかったかもしれません。

その夜遅く、彼の父親からLINEが入りました。私とのやりとりが次の内容です。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「先生、今日はありがとうございました。息子は、大学での2年間で『漂流』しているだけで、何も語れることも誇れることもない自分を先生には見せられなかったのだと思います。でも、結果的には、先生から気合をかけられて、良い刺激を受けたのでは、と感じています。」

「こちらこそ、楽しいひとときをありがとうございました。いやいや、漂流している人生も別に悪くないですよ。人生に無駄なことは一つもないわけですから。『有』を生み出すには、長くて苦しい『無』の時間も時として必要です。

自分の誇れることを周囲に高らかに語れる人間になることより、何も語らずとも、知人や友人にニコニコしながら酒をつげる人間が、私は好きです。

教え子には、金持ちとか有名人になることや人生の勝ち組と呼ばれる人間になってほしいとは思っていません。金メダルやノーベル賞を獲ることよりももっと大切なことはあるはずですから。

まあ個人的には、『みんなで集まってワイワイやっているから、今から来い』と言った時に、どんな立場や状況でも喜んで駆けつけてくれる、そんな人間になってほしいと思います。(笑)。私が愛してやまない〇〇に、いつまでもエールを送っているからと、くれぐれも宜しくお伝えください。」

「ありがとうございました！このままそっくり伝えます。」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

私は、人と人は偶然に出会うものでなく、出会うべくして出会う運命の互いの存在だと思っています。家族や山淵中の仲間も含めて、これまで出会った人間をいつまでも大切にするように。そして、これから出会うべくして出会う人間と、縦と横の糸をしっかりと紡いでかけがえのない絆を創り上げていってください。私が望むのは、この一点のみです。

3年生の皆さん、心から『卒業おめでとう』。